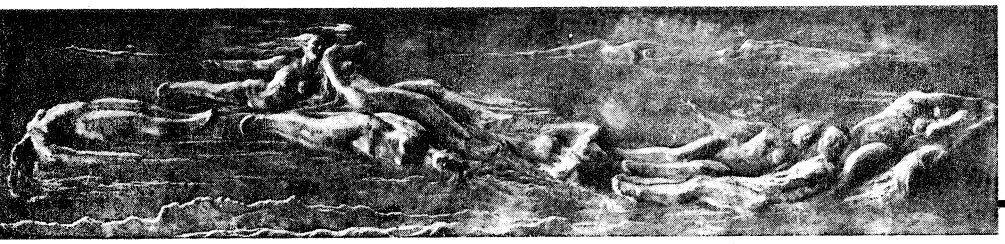
京都大学附属図書館報



静脩

1968年 9月
Vol. 5, No. 3

The Kyoto University Library Bulletin

医学図書館によせて

脇 坂 行 一

私は1952年より1954年まで英国 Oxford 大学に留学する機会に恵まれたが，Oxford 大学には自然科学関係の綜合図書館として Radcliffe Science Library があり，研究の合間にしげしげ同図書館に足を運んで文献の探索や閲読に時を過したのも，今はなつかしい思い出である。Oxford は市街の中心部全体が大学のような街であるが，私達の属した医学部より同図書館までは徒歩ででも気軽に行ける距離であり，そこには自然科学の各分野の単行本や雑誌類が豊富に取りそろえられており，私達のような医学研究に携わる者にとっても，たいていの文献は同図書館で閲読することができ，誠に好都合であった。また館員の数は少なかったが，全部開架式で自由に閲覧することができ，また日没後もおそくまで開館していて，利用者には非常に便利であった。

そのほか Oxford 大学には，有名な Bodleian Library がある。この図書館は1598年 Merton College の Sir Thomas Bodley によって設立されたもので，1605年 James 一世がこの図書館を訪れた時，「余がもし国王ならざれば，余は大学人たらんことを慾す。また余がもし囚人となる心要あらば，余はこの図書館以外の獄に入ることを慾せず，これら善良なる著者達と一緒に繋がれんことを慾す」と語ったという挿話がある。1620年ロンドンの書籍出版業組合は，その印刷するすべての書籍を一部ずつ同図書館に寄贈することを決議し，その後同様のことが British Museum, Cambridge University Library, Library of Trinity College, Dublin に対しても行なわれているという。

以上は少し古い話であるが，現在では科学は日進月歩であり，世はまさに文献情報の洪水時代であるといっても過言ではない。医学関係だけでも，現在全世界で出版されていると推定される医学雑誌の数は約5,000とも6,000ともいわれている。日本で発行されている医学中央雑誌に収録されている日本の医学雑誌だけをみても昭和40年9月で和文誌1,018，欧文誌118，合計1,136誌におよんでいるので，実際に全世界で発行されている医学関係の雑誌は上記の数よりもさらに多いものであろう。もちろんこれらの雑誌がすべて質的にすぐれたものであるということはできないが，現在医学関係の文献探索に最もよく用いられている Index Medicus に収録されている代表的雑誌だけでも1966年で2,500誌におよび，その収録論文数は年間約18万件，1969年末までには年間約25万件に達する見込であるという。このように年々増加する膨大な文献の探索を人力で行なうには，多大の労力と時間を要するので，米国の National Library of Medicine では1964年以来電子計算機を使用する医学文献分析探索組織(Medical

Literature Analysis and Retrieval System, MEDLARS) を開発し，Index Medicus もこれによって作成されている。

京都大学医学部においても，先に静脩2巻2号で紹介されたように藤原財団，China Medical Board of New York, Rockefeller Foundation 等の援助と関係各方面の努力により，1965年5月31日医学図書館が完成し，従来各教室に分散していた図書室が中央化され，文献複写，Contents service，他大学医学図書館との間の文献，情報の交換等種々の面で利用者の便利が増大したことは喜ばしいが，まだ図書館固有の定員が少ないこと，図書館本来の予算が少ないため，図書購入費や維持運営費の大部分を各教室研究費よりもちよらなければならないこと等，医学綜合図書館として今後改善されなければならない多くの問題を残している。MEDLARS が日本にも導入されんとしている今日，上記の諸問題に対しても適切な対策が講ぜられて，医学図書館が真に大学における医学研究および医学教育の中心としての使命を果たしうるようになることを希望するものである。　　（医学部教授，医学図書館長）

図書館商議会の開催

本年度の第1回商議会は，7月10日午後3時から開催され，各種報告に引きつづいて，「附属図書館の将来計画」について審議が行なわれた。

報告事項は，前年度の活動状況として，年間受入冊数が17万3千冊，図書利用人員も4万2千人に達したことが報告された。しかし，本館予算の伸びがほとんどなかったため，新しい事業や企画としては，とくに報告すべきものはなかった。そのほか，本年6月から，従来全国国立大学図書館長会議と称していた国立大学附属図書館の全国組織が組織を強化するため，国立大学図書館協議会に改組されたこと，および，来年5月に，日米の大学図書館関係者の会議を東京で開催すること等が報告された。

ついで，議題の「附属図書館の将来計画」としては，まず施設面の問題がとりあげられた。現在の施設では，増大する図書館利用者に対応しえず，学生からも座席数の増加について強い要求が出ていた。幸い本館の西隣りに建設中の建物を，本館の別館として使用することが認められたので，これに特殊資料関係の部屋を移し，本館1階に第2閲覧室を開設する案について審議され，原案通り承認された。しかし，今後の問題として，全学的な書庫不足を解消するための保存書庫の建設と，新しい図書館活動の構想の上に立った本館の新営についても，今後具体的な方策を検討すべきだという意見が出された。

運営の面においては，まず，宇治地区の5研究所の共同利用の図書館を本館の分館とする件が審議された。そして，分館構想は結構であるが，分館の経費・人員等の点について，今後解決すべき問題があることが指摘された。また，部局間の相互利用の促進についても了承されたので，今後本館で部局図書掛長と相談して，利用上の手続の改善を検討することになった。

整理事務の遅滞はつねに指摘を受けることであるが，激増する図書の量に態勢が追いつけずにいる。しかし，洋書の整理に関しては，米国議院図書館から寄託されている印刷カードを，全面的に整理事務に利用することによって，能率化が進められているので，軌道にのれば，かなりの効果が期待されうることが図書館側から報告された。

さいごに，サトラー赤外線チャートの購入が認められたので，これに対する委員会を作ることが了承されて，商議会を終った。

一言・ふたこと

図書は眠っている
図書館制度の改革を

猫に小判ということがある。大学の図書館は所有冊数もさることながら，利用度で誇るべきものであろう。農学部図書委員となり，その利用度が増すことに専心努力してきたつもりであるが，いかんせん利用度は外国の十分の一にも達していない。私が1年留学した，アメリカの教授は専門分野・研究内容別にリプリントかコピーでファイリングをしているが，個人所有の本は講義用テキスト位のものしかもっていない。学生にしても同様で総て図書館を利用している。どうも日本人は自分のものとして机の横に置きたがる癖がある。アメリカでは理科系の学生ならば1日70～100ページ，文科系では200ページ前後の参考文献を読まされ，時として時間を予約して読まねばならぬことがある。これらは先生の指定したものであるが，本学部でもそれに類する指定図書の利用度は高い。いま一つアメリカの大学では図書館が一つに統一されていることである。従って重複図書はテキストを除いてほとんどなく，当然雑誌の種類も豊富である。本学部においても重複雑誌だけはなんとか整理したいものである。図書館が統一され一つの場に集中されると，読む人と場のふんい気に刺激され，また読まねばならないものもわかり，負けまいとする競争心もわいてくるのではなかろうか。けっきよく利用度は各人の自発的ファイトによるものかもしれないが，図書館の環境をよくすると同時にサービス面でもっと人をうまく動かすよう努力することも大切である。UCLA では読む人の立場に立ってカラーコンディショニングをしているがその中には草木，花に至るまで含められている。日本ではほど遠いことかもしれないが，大学全体としては今後の問題として是非考えるべきことである。ともあれ図書は眠らせておくものでなく，活かすものであり，その生殺権は利用者・指導者とサービスに当る人の努力によるものであろう。

（農学部助教授・獅山慈孝）

図書収集の盲点
農学部図書室を利用して

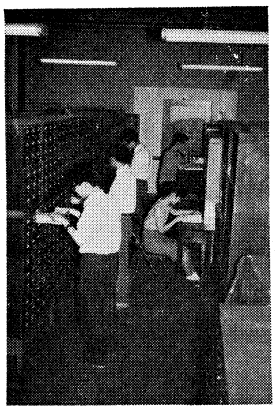
図書の利用となると，やはり身近にある農学部図書室ということになる。附属図書館と違って小規模ではあるが親しみが感じられる。暇な時を見つけては，気軽に雑誌や新聞に目を通すこともできる。一方，書籍についてみると，一般に学部図書館となるとどうしても専門書が多くなり，逆に基礎科学に関する書籍が少なくなりがちである。しかし，これらはちようど，われわれが語学を勉強する際に，辞書を常に側に置いておくのと同様，専門書を読むに当っても，是非必要なものである。この種の書籍の不足という点では農学部図書室も例外ではない。また，各大学やその他の研究機関等（特に海外の）から出版された文献で，本学に備っているのが意外と少ないのに驚くのだが，こういった種類の文献を入手するためには，やはり本学図書館が積極的に海外の各大学等との交流を計るべきであろう。その他，雑誌類の選択についても，もっと広範な視野からなされることが望まれる。

（農学部　T.H.院生）

図書館だより

ご存知ですか

○目録カードをひかれるかたへ


一階にあるカード室

本館の目録カード室にあるのは，全学の総合目録カードです。昭和39年7月（受入）以前は古いカード（小型）に，それ以降は新らしいカード（大型）になっていますので，念のために両方を検索して下さい。

○**和書書名目録**　大型カードは書名の五十音順で，小型カードは字順で排列されています。

○**和書著者目録**　著者名のアルファベット順（ローマ字・訓令式）に，外国人名はそのままのつづりで排列されています。

○**洋書著者目録**　標目のアルファベット順に排列されていますが，雑誌・辞典・叢書等で書名から記入されているものは，書名で排列されています。（目録カード検索への手引き参照）

雑誌は冊子目録を利用されると便利です。別に2階閲覧室の廊下に本館の分類目録，特殊文庫目録及び法・経和漢書分類目録があります。

○京都大学学術雑誌総合目録（自然科学欧文篇）改訂版編さんに着手

本学所蔵雑誌総合目録のうち，自然科学欧文篇は1965年に刊行されましたが，その後に，幾多の new titles や，新設教室の所蔵雑誌が受入されました。そこで，このたび，内容を up-to-date にするとともに，一層の充実を期して，改訂版を作成し，多方面からの強い要望にこたえることとなりました。すでに各部局図書室・教室の熱心な協力によって，6月1日現在の本学所蔵の自然科学系雑誌について再調査し，原稿カードの作成を急いでいます。本年度中には刷り上がる予定です。

○二つの寄贈文庫　――文学部へ――

1.　須田文庫

須田国太郎氏は大正5年本学文学部（美学美術史専攻）卒業の後，画家の道を進まれた。その間，文学部講師として西洋美術を講じたり，工学部講師として描画を教えたりもされたが，早くから独立美術協会の会員となり，晩年には京都市立美術大学教授，芸術院会員となられた。その画業はまことに偉大であり，識見の高さも世の尊敬を集めた。死去（昭和36年12月16日）後，遺族・長男寛氏の好意により，蔵書一切（和書約2500冊，洋書約1500冊）が本学美学美術史教室に寄贈されることとなり，目下図書室において整理中である。完了のあかつきは「須田文庫」として文学部に収蔵される。

2.　木方文庫

木方庸助博士は大正5年本学文学部文学科を卒業後，松山高等学校教授，広島文理科大学教授，神戸市立外国語大学学長，京都外国語大学学長を歴任された。中世末期より近世初期に到る英国演劇に関する知識がきわめて深く，英国演劇に関する多くの著書がある。蔵書もその分野の文献が中心である。博士死去の後，嗣子木方洋博士の好意により，蔵書（英米書108部154冊）が英語英文学教室に寄贈され，「木方文庫」として文学部に収蔵される。

○鈴木文庫目録続編発行される ——文学部——

昭和31年に刊行した中国文学の権威故鈴木虎雄博士の旧蔵書の「鈴木文庫目録」の続編がこのほど完成した。

資 料 紹 介

International Encyclopedia of the Social Sciences. 17 vols. 1968. New York.

1930年来 E. R. A. Seligman の Encyclopedia of the Social Sciences. 15 vols. が学界に寄与した功績は大きい。今また本事典成る。しかし，編集長 D. C. Sills の序言によれば，これは 1960 年代の激動世界のすべてを社会科学的に，はあくせんとする努力ではあるが，Seligman の Encyclopedia に替わるものではなく，それを補うものであると。両事典は学的にも世代的にも連続するものであり，併用されるべきであろうか。領域も等しい。本事典もまた，人類学，経済学，地理学(自然地理を除く)，歴史学，法学，政治学，精神病学，心理学，社会学，統計学の各分野にわたり 1,716 項目を収録す。みな選ばれた30ケ国の選ばれた1,500名の署名入書き下しである。参考文献も1967年を含めて新しい。人名項目600，今回は1890年生れ以前に限って生存者も収めている。なお，第17巻索引は前後参照の精密さに，約30,000の細目をテキスト同様 ABC 順に配列して，利用者に至便である。

京都府資料所在目録（京都府立総合資料館・京都図書館協会共編）

京都府の郷土資料目録は今までその必要をみとめられながら全地域をもうらしたものがなかったが，このたび府立総合資料館で編集を企画され昭和41年よりはじめて，ようやく43年に刊行された，縦 26cm，762p の大冊である。この目録は京都府下の公共図書館，大学図書館，学校図書館ならびに公開されうる個人所蔵の資料が 8,439 タイトル収録されている。地域は京都府の管轄区域のほか，丹波地方，多紀郡，氷上郡（兵庫県）とし，京都府全域を京都市，山城，丹波，丹後に区分し，地域のなかは日本十進分類法により主題別に排列されている。内容は京都府下各地域の事象を調査研究あるいは説明している資料に限られているので，単に府下で発行されたもの，府下出身者と言うだけの著作物は除いてある。

この目録を索引される方は巻尾に書名索引と件名索引（五十音順）がついているからそれにより図書番号を調べて見出すことができる。

教官文庫（今回ご寄贈分）

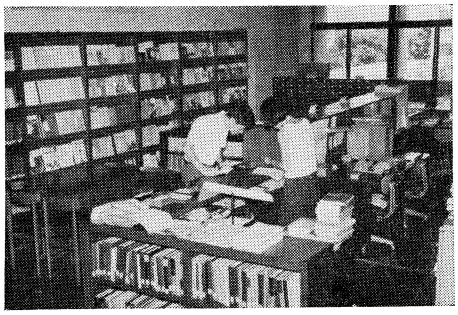
「敗戦の痕」鳥養利三郎（名誉教授・工）等著　仁友会　昭43
「イギリス文学—案内と文献—」御輿員三（文学部教授）編　研究社　昭43
「港湾工学」長尾義三（工学部教授）著　共立出版　昭43
「教材社会学」作田啓一（教養部教授）等編　有斐閣　昭43
「新編　物理学」三谷健次（教養部教授）著　広川書店　昭42
「日本鉱山史の研究」小葉田淳（文学部教授）著　岩波書店　昭43
「食品生化学」松下雪郎（食糧科学研究所教授）著　共立出版　昭43
「京都叢書」第1，6—9，13，17—19巻，野間光辰（文学部教授）編　臨川書店　昭42～43.
「物性工学の基礎」田中哲郎（工学部教授）著　朝倉書店　昭43
「改訂　量子化学入門（上）」米沢貞次郎（工学部教授）等著　化学同人　昭43
「現代の経済学史」出口勇蔵（経済学部教授）著　ミネルヴァ書房　昭43

工学部電気系図書室

電気系図書室とは電気,電子,電気第Ⅱの三教室共通の図書室を称してそう呼ばれています。旧図書室から電気綜合館に移転して,今年で満5年になり,この綜合館の四階全部が図書室にあたるわけです。南北に窓があり,夏は通風がよく,冬は暖房設備があって快適に読書ができます。北窓のながめは以前は申しぶんなくよかったのですが,ここ2,3年前から,土木,建築それに今建設中の大型計算機センターの建物などで,だんだん北山や比えい山の景観がせばめられ,美しい自然がみられなくなって来ましたが,快晴の日の比えい山はまた格別で,今にも山が迫って来るような威容はこの図書室ならではみられない風景ではないかと思っています。この近代性を誇る電気綜合館のてっぺんの図書室にエレベーターやリフトの設備がないのは致命的で,本の登録や製本などの業務の困難さ,また利用される人たちにも不自由をかけている現状です。

戦後または最近においても図書の種類や数は飛躍的にふえたわけではありませんが,利用者の数は驚くほどふえました。特に外部や他教室の利用者が多くて,これは貸出規則を当教室の教職員,学生と区別せずに全く同じ待遇をしているからではないかと思っています。ここで図書室の目的とか,抱負といったことの概要をお話するとすれば,どこの図書室でも基本的な開架制度が十分普及していないように思うのですが,本来は図書は,書架に眠らせておくものでなく,皆んなの人達に活用され読まれてこそ価値があり,ひいてはそれが学問の進歩や発展につながるものなので,余り窮屈な規則は設けないことにしています。それはルーズにすることと違って利用しやすいようにするためです。たりない予算を有効に使う努力は並たいていではないですが,図書委員の教官と相談の上,よい雑誌,資料,書籍を充実していくよう,また新年度はどこに重点をおけばいいかとかいうようなことも話し合います。うっかりしてあの時の本を買いそこなって,二度と手に入らないことのないようにしたいと思っています。

ご承知のように近年工学部は教室がふえましたので,理想をいえば工学部だけの綜合図書館が設けられれば未端の図書室との有機的なつながりが保たれ,もっと有効に利用できるのではないかと思いますが,今の所,お金と人の問題で実現はむづかしいことでしょう。図書室というのは,ただ施設の大きさや物の数だけを自慢しても,かんじんのそれを有効に利用し,より価値のあるシステムにしなければ意味がありません。先ず自館の実力をつけることを主眼にしたいと思っています。更に教職員,学生にいかに利用されているか,研究と教育の中枢機関として,どんなに重要視されているか,皆んなよく認識してほしいと思っています。



あとがき　・館内改装工事のため,今夏は長期にわたって閉館をし,その間,皆様にご迷惑をおかけしましたことを深くおわびいたします。本館も昭和23年以来の汚れを一掃,美しく明るい図書館となりました。清涼の秋も間近です。「図書の眠り」を覚すよう,いま一層ご利用下さい。

・「図書収集の盲点」の中にもご指摘下さったように,海外諸大学との連けいを更に密にし,研究紀要等の収集にも力を注ぎたいと思います。

京都大学附属図書館報「**静脩**」Vol. 5, No.3 (通巻24号) 1968年9月15日発行・編集発行人:
岩猿敏生　発行所:京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771—8111 (内線) 2220～2238